弟子屈高等学校創立70周年

今の弟高、これからの弟高

北海道弟子屈高等学校
町内唯一の高等学校として
１９４８(昭和23)年の開校から70年を迎え
７千人を超える卒業生を送り出してきました
同校ならではの特色あるカリキュラムに加え
地域の支援にも支えられ
生徒は充実した高校生活を送っています
70周年を迎えた「今の弟子屈高校、これからの弟子屈高校」
について紹介します

歴史

これまでの歩み

▼１９４８年（昭和23）
北海道庁立標茶農業高等学校弟子屈分校として設置（定時制）
▼１９５１年（昭和26年）
北海道立弟子屈高等学校として独立
▼１９５４年（昭和29）
校舎落成
▼１９５６年（昭和31）
校旗を制定
▼１９６２年（昭和37）
全日制課程併置
▼１９６４年（昭和39）
道立へ移管
校歌制定
▼１９７５年（昭和50）
第１回強歩遠足（１年生のみ）
▼１９７７年（昭和52）
強歩遠足全校行事になる
▼１９８７年（昭和62）
定時制閉課
▼１９８８年（昭和63）
新校舎落成（現校舎）
▼１９９７年（平成９）
校訓を制定
▼１９９８年（平成10）
弟子屈高校の教育を支える会設立
創立50周年記念式典開催
▼２０１８年（平成30）
創立70周年

校章（1956年４月16日制定）

十字に組んだクマザサは、北辺の風土に根強く静かに生きる生命と質実剛健な気風を表します。四方に校運の発展を期するとともに、各葉がそれぞれ「知」「情」「意」「体」の均衡ある成長を目指すことを表現。葉元にローマ字の「T」を４個配して、校名を表しました。

校訓（1997年10月25日制定）

自彊不息（じきょうしてやまず）

たゆまず自ら鍛錬に励み、たくましく生きる。

校歌

作詞　小田　観蛍
作曲　小泉　正松

一　高澄む朝空　かがやく日かげ
生気のあふるる　眉根を上げて
希望は遥けし　自主持つ一路
きたふるからだに　知徳を磨く
学び舎弟子屈　励まむいざや

二　そびゆる摩周は　心の高嶺
並み立つ山々　真昼をしづめ
嶮しき岩根も　おどろの道も
正しき志向に　踏み分け行かむ
学び舎弟子屈　いそしめいざや

三　めぐれる大湖に　北斗は斜め
自然の恵みは　郷土のほこり
柏の林に　春秋過ぎて
美はこれ北国　それさへ試練
学び舎弟子屈　努めむいざや

今の弟高

充実したキャリア学習による高い進学・就職率

「弟子屈高校に入学してよかったと思うことは？」生徒の皆さんに聞いてみると、学年を問わず返ってくる答え。「進路指導が充実していることです」

同校の特徴が「キャリア学習」。キャリア学習とは、将来の自分を考える授業。自分はどんな仕事につきたいのか、自分にはどんな仕事が向いているのか、世の中にはどんな仕事があるのか…。こうしたことを一人ひとりが考えるお手伝いをすることで、生徒は将来の就職先・進学先を的確に見極め、取り組んでいくことができます。2間口の高校としては、全道トップレベルの進学率・就職率となっており、大学への推薦枠も多く、進学しやすい環境も整っています。

平成29年度卒業生進路状況(45人)

国公立大学／北海道教育大学釧路校・釧路公立大学
私立大学／北海道医療大学・日本医療大学・札幌保健医療大学・北翔大学・國學院大學北海道短期大学部
【進学】4年制大学／9人・短期大学／1人・看護学校／1人・専門学校／13人
【就職】公務員／10人・民間企業／11人

▼キャリア学習の内容
- 職業を知る
- 仕事分析・自己分析の方法を学ぶ
- 適性診断の方法を学ぶ
- 釧路市内の大学の見学、大学や専門学校から講師を招く体験授業
- 職場見学、町内企業での職場実習

●職場実習●

毎年、2年生を対象に実施しています。「働くということ」「職場」「職業人として求められる資質」を学び、進路選択に役立てることが目的。生徒の皆さんからは「仕事の楽しさや大変さを学んだ」「社会に貢献する素晴らしさを知った」などの感想が寄せられています。

●大学見学●

毎年、1年生を対象に実施。大学について理解を深めるとともに、大学では弟子屈高校出身の学生の講話や模擬講義を体験。将来の社会人としての資質についても学び、適切な進路選択に生かしています。

●面接指導・講話●

就職試験などで欠かすことができない面接。面接指導は同校の全教員が対応しているほか、弟子屈町商工会などの皆さんを外部講師として招き、模擬面接指導や講話をお願いしています。本番同様の緊張感を体験するとともに、自分の課題を確認できる機会となっています。

確実な学力向上を目指し

キャリア学習で明確にした自分の進路。その実現のためには、確かで豊かな学びが求められます。

同校では、さまざまな形で生徒の確実・着実な学力向上を目指しています。

●コース制●

同校では「コース制」を導入。

2年生から、αコース(大学・短期大学・看護学校への進学を希望)、β(公務員・就職、専門学校への進学を希望)の2コースに分かれ、進路に応じた学習を深めています。希望する進路に必要な選択科目が多数用意され、きめ細やかな指導が受けられるほか、同じ進路志望の生徒同士がお互いに励まし合って高め合えるという利点があります。

●習熟度別授業●

同校では、数学と英語の2教科で「習熟度別授業」を行っています。

各学年の生徒が「発展」「標準」の2コースに分かれて授業を受け、苦手の克服と得意分野を極めることに取り組んでいます。

●英語指導●

同校の英語授業は、全て英語で行われています。同校では、2人の英語教諭と、町や釧路教育局から派遣されるALTと協力しながら、全て英語での授業を実現。生徒は英語を聴く力と、生きた英語力を身につけています。

●クラウドサービスで進路実現と学び直しを●

今年度より大手出版社の学習支援クラウドサービスを導入し、最先端の動画授業を視聴しています。大学や看護学校受験に対応するほか、基礎基本の学びなおしについても対応しています。

ふるさとをよく知るため

同校では、総合的な学習の時間でふるさと弟子屈町への理解を深め、まちが抱える課題の解決方法を探ることを目的にさまざまな取り組みを行っています。

●弟子屈探究●

今年から新たな学校設定科目「弟子屈探究」がはじまりました。

弟子屈の歴史や自然、文化、産業などを包括的に学び、地域への理解と関心を深めることが目的。自然散策やカヌー、スノートレッキングなどのフィールドワークを行い、年度末には成果発表会を行います。

●観光プランニング●

同校では毎年、3年生が神戸市で開催される「全国高等学校観光選手権」出場を目指した取り組みを行っています。弟子屈の魅力を再確認し、考案した地元の観光プランを競います。

僕らのスクールライフ

進路決定に柔軟に対応してくれた

3年
山本 彩香(やまもと あやか)さん
(βコース)

元々は専門学校を希望しβコースを選択していたが、さまざまなキャリア学習を行う中、進学希望の学校の情報や、先生方のアドバイスもあり、大学に進学する気持ちが強くなり、βコースではあるものの、αコースの内容を放課後にフォローしてもらうなど、柔軟に対応してもらうことができています。先生方にはすごく感謝しています。

学校生活では、生徒会活動を通して充実した高校生活を過ごしています。

職場体験が進路希望の決め手に

3年
樋口 竜希(ひぐち たつき)君
(βコース)

弟子屈高校への進学は、中学校のときに行った壁新聞の取材がきっかけでした。取材を通して、弟子屈高校の進路指導の内容を知ることができ、就職希望だった自分に最適な進路を選べたと思います。高校2年のときには、実際に職場体験もでき、進路決定にすごく役立ちました。

部活動は、バトミントンやテニス部に所属し、人数は少ないながらも、一生懸命することができました。

川湯からの進学 不安もすぐに解消できた

2年
原田 愛(はらだ めぐみ)さん
(βコース)

川湯中学校から進学しました。川湯と比べると大きな学校だったので、少し不安もありましたが、先生や先輩からのアドバイスもあり、積極的になることで高校生活に慣れることができました。

2年生から生徒会活動をはじめて、行事の準備など、たいへんなこともありますが、充実した高校生活を過ごせています。今後はキャリア学習を通し、進路決定に向けてがんばりたい。

弟高祭のアトラクションに憧れて

2年
森内 ひなの(もりうち)さん
(βコース)

高校入学前に、弟高祭のアトラクションを見たり、学校訪問をして、弟子屈高校に進学しようと思うようになりました。高校の勉強は、中学までとは違い専門的な授業もあり、不安な点もあるとは思いますが、先生たちの熱心な指導もあるので、安心して入学してほしいです。

進路についても、先生方の手厚いサポートがあるので、進路に迷っても安心して相談できます。

部活動

同校では、部活動も活発に行われています。

今年は、テニス部の男子・女子ともに、シングルス、ダブルスで全道大会に出場。陸上部からも全道大会に出場するなど、めざましい活躍をしています。その他の部活動も少人数ながら充実した活動が行われています。

野球部

バレー部

陸上部(北風選手らと)

テニス部

クッキング部

吹奏楽部

これからの弟高

少子化が続く中 魅力ある高校であるために

平成30年度の弟子屈高校への入学者数は、27人（町内中学校からは26人）となり、過去最低の数字となりました。町内の中学校からの入学率も、過去最低の41・9％となり、60％近くの生徒が弟子屈高校以外の進路を選んだということになります。これまでの町内中学校の弟子屈高校への進学率は、60～70％ほどで推移していて、これほどまでに低い数字は、関係機関にも驚きを与えました。

今回紹介しました弟子屈高校の取り組みは2間口の公立高校としては、道内トップクラスの進学実績をほこり、就職については公務員に多数合格するなど、8年連続で100％の内定率というすばらしい結果に結びついています。

しかし、入学者数は、減ってしまいました。

弟子屈高校の入学者の減少は、学校の存続問題だけではなく、まちそのものにも、影響を与えることになります。

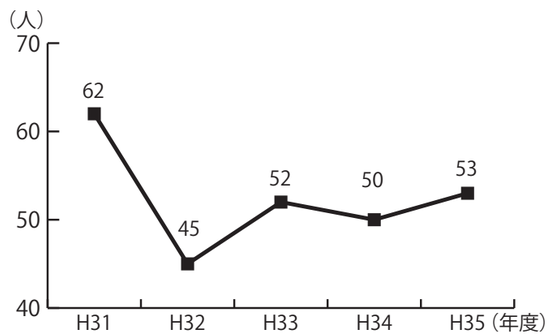
弟子屈に必要な貴重な人材が、町外に流出し、働き手である若い世代が減少することになります。特に若い世代の減少は、人口減少に拍車をかけるだけでなく、町内の経済にも大きな影響を与えることになります。

町では、弟子屈の活気を維持するためにも、弟子屈高校が魅力的な高校で在り続けるためにさまざまな支援を行っていきます。

創立70周年を迎え、平成31年度からは、25年ぶりに新しい制服になり、新しい弟子屈高校が始まります。長い歴史と、すばらしい実績を誇る同校を多くの方に知ってもらい、魅力ある学校で在り続けるために、もう一度「弟子屈高校」に注目し、その可能性について目を向けてほしいと思います。

平成31年度からは、新しい制服に
（弟高祭の際には選定の参考に総選挙も実施）

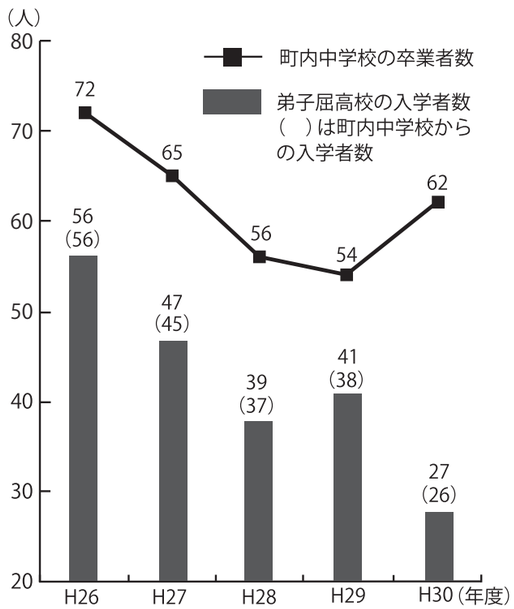
今後５年間の町内中学校の卒業者数の推移（見込み）



町内中学校の卒業生の弟子屈高校への進学率は60～70％で推移していましたが、平成30年度入学者は、約40％まで低下しました。

今後５年間の町内の中学校卒業生の推移を見ても、毎年50人ほどが見込まれています。その60％が弟子屈高校へ入学しても、30人ほどとなり、２間口の確保は厳しい状況です。

町内中学校の卒業者数と弟子屈高校の入学者数



町からの支援

●大学進学支援●

進学を希望する生徒のため、インターネットを活用した大手出版社によるクラウドサービスの受講を支援。進学へのサポートしています。

●就職活動支援●

就職を希望する生徒のための、職場見学の取り組みを支援。町バスでの送迎や資格関係の参考図書などの購入も支援しています。

●強歩遠足の支援●

同校の伝統行事である強歩遠足の運営に対して支援し、同校の魅力向上を支援しています。

●各大会への支援●

新聞局全道大会、英語ディベート大会、運動部の全道大会など、参加費用などの一部を支援しています。

●通学支援●

川湯地区、屈斜路地区からの通学生について、通学の費用を全額支援。町外からの入学者に対するJR定期券購入、下宿費の支援も行っています。

●人材育成支援●

町内の学校に通う児童・生徒が資格取得するための費用の一部を支援し、地域に貢献できる人材育成を行っています。

弟子屈高校の教育を支える会

弟子屈高校の教育の振興を図るため、弟子屈高校、町、町議会、町教育委員会、弟子屈・川湯中学校の校長・同校PTA、弟子屈小学校長・同校PTA、町商工会、JA摩周湖、摩周湖観光協会、自治会連合会などで組織する「弟子屈高校の教育を支える会」では、弟子屈高校の発展と人材育成のための支援を行っています。平成29年度には、同校の生徒を募集するためのポスター作りを支援しました。同会では、今後もさまざまな取り組みを通し、支援を行っていく予定です。

少人数ならではの進路指導 生徒一人ひとりに光を

宮崎　円 校長

4月に着任した校長の宮崎です。

弟子屈高校に赴任し数カ月ですが、本校の生徒は、日常生活においては、非常に落ち着いて生活でき、行事などが行れる時には、その成功に向かい情熱を爆発させ、一生懸命頑張れるという一面があることがわかりました。学習面においては、昨年度も、4年制の大学や公務員に多数合格するなど、よく頑張っているなという印象です。

ただし、今年度の入学者数は、27人となり、町内の中学校からの入学割合も4割ほどに減少し、大きな課題と感じています。

本校では、今までも少人数であることをむしろメリットと考え、生徒一人ひとりの声が届くようきめ細やかな指導を行ってきました。今後も地域の中学校の生徒やその保護者に選ばれる学校になるため、キャリア教育を中心とした取り組みに磨きをかけ、生徒一人ひとりに光が当たる教育を実践していく必要があると思います。

今年度は、本校の生徒が地域の取り組みにも積極的に参加しています。小中高の一環したキャリア教育を通し、地域の子どもたちのリーダーとしての役割を担い、地域へ貢献することは、生徒たちの将来にとってすばらしい経験になると思います。

創立70年周年 今後も地域を支える人材を育成する

本校は、創立70周年を迎え、大きな転換期を迎えています。人口減少により、子どもたちの数は年々減少し、入学者の見込みも減少しています。

今後は、小規模な学校ならではの特徴を生かし、小・中学校などで行われている子どもたちの主体的な学習方法を本校にも取り入れるなど、地域とひとつになって子どもたちを育てていく環境を作っていくことが必要と感じています。

本校は、これまで地域の方々に支えられ、そして、地域を支えていく存在でした。そのあり方は、今後さらに重要になると思います。